

妊娠先行婚女性の家族形成過程の特徴

著者	跡上 富美
雑誌名	東北大学医学部保健学科紀要
巻	20
号	1
ページ	45-54
発行年	2011-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/49387

妊娠先行婚女性の家族形成過程の特徴

跡 上 富 美

東北大学大学院医学系研究科 ウィメンズヘルス看護学分野

Characteristics of Becoming a Family Process for the Unintended Pregnant Women

Fumi ATOGAMI

Women's Health Nursing, Tohoku University Graduate school of Medicine

Key words : unintended pregnancy, becoming family process, constant comparative analysis

Purpose : The purpose of this study was to describe the becoming a family process of unintended pregnant women.

Method : Data for this qualitative descriptive study was collected from three semi structured interviews on 11 unintended pregnant women were selected. Those subjects were expected as a normal pregnancy. The data were analyzed using constant comparative analysis was used to develop and refine codes. Relationships among categories were tried to diagram.

Result : The participants' age ranged from 20 to 32 years old. Five inter related categories emerged from the analysis. 'Intention that becomes family', 'Beginning of a life for a temporary expedient family', 'Forming family for the pregnant period', 'Settles to the family' and 'Becoming as a new family'.

Discussion : The characteristics of the becoming family process are the following: 1) In cases of unintended pregnant women, their intention of marriage prior to noticing pregnancy gives a great influence on their future family becoming process. 2) In unintended pregnant women case, immaturity of both herself and her husband causes a risk in 'becoming family process'. 3) In the family becoming process of unintended pregnant women, the relationships with their parents are also an issue. 4) The number of unintended pregnant case are predicted to increase, therefore, development of either medical or social community network is required.

I. はじめに

我が国の妊娠・出産を取り巻く環境は、めまぐるしい変化を経験している。出産数の低下はもちろんのこと、養育環境である親たちがおかれている状況も刻々と変化している。育児について、難しさや孤立感を訴える母親は多くなってきている。その原因の一端と考えられるのが、親同士の関係性の発達や家族形成上の問題と考えられる。

しかし、この点を考慮した研究は未だ発展途上にあるのが現実である。

現在我が国においては、従来の結婚から妊娠といった家族形成過程とは異なる家族形成が増加してきている。いわゆる「できちゃった結婚」(以下、妊娠先行婚とする)と呼ばれる妊娠してから結婚して家族を作り始めるという結婚形態においては、親役割の獲得や配偶者との関係調整、生活習慣の変化など養育期と新婚期に経験するとされる

発達課題が同時期に併存するという極めて特異な状態であり、このことにより養育期に良好な家族機能を維持していくことが困難になると予測されている^{1,2)}。このようなリスクをはらんだ結婚形態は現在増加の一途をたどっており、平成17年度出生に関する統計³⁾によれば、わが国における嫡出第1子出生数における妊娠期間よりも結婚期間が短い割合は1980年には12.6%であったものが2004年には26.7%と倍増している。しかも全体の嫡出第1子出生数がこの24年で約14万人減少している中での増加である。母の年齢別階層でみるとよりこの状況は明確であり、15～19歳では8割、20～24歳では6割、25～29歳で2割、30歳以降でも1割をしめ、各年齢層で増加傾向を示し、妊娠先行婚による家族は増加の一途をたどっている。

しかし、一方で妊娠先行婚は計画性のない妊娠に伴う早産のリスクが高く、妊娠中のストレスや抑うつレベルも高いと報告されている^{4,5)}。また、妊娠先行婚の母親は子どもとの愛着レベルが低く、否定的な感情を持ちやすく、父親の育児参加も低くなるとの報告もある⁶⁾。元来、結婚後妊娠した夫婦においても、妊娠出産後の夫婦関係の関係性の質は低下するとされている⁷⁾。夫婦として親としての発達課題を持ちながら、早急に家族となることを求められる妊娠先行婚夫婦はそのリスクが高くなることは明白である。それでは彼らはどのようにしてそのリスクを乗り越え、夫婦として親としての関係を築いていくのであろうか。また、夫婦として親としての関係を築いていく上で影響するものは何なのであろうか。妊娠先行婚夫婦たちは、従来言われてきた結婚後に妊娠した夫婦たちの家族形成とどのような相違を持っているのであろうか。以上の点から妊娠先行婚夫婦の家族形成の過程とその影響要因を明らかにしていくことは急務であり、今後ますますの増加がみられるであろう、この婚姻形態を持つ家族に対する子育て支援の重要な基礎資料になるのはもちろん、リスクを持つ家族への介入内容や手段を確立していく上で非常に有用であると考ええる。

II. 研究目的

本研究では、妊娠先行婚女性の妊娠期から出産後1カ月の間に女性がパートナーとの間に家族を形成していく過程を明らかにすることを目的とした。

III. 用語の定義

1. 家族形成過程

男女が入籍し、夫婦という法的な関係をスタートとして、夫婦として、父親—母親として、親子としての関係を築く過程

2. 妊娠先行婚女性

妊娠の発覚を契機として入籍し、夫との同居を開始した女性

IV. 研究方法

1. 研究のデザイン

本研究は質的記述的研究の研究デザインをとっている。

2. 研究対象

対象は、A市内にある個人産科クリニックにて妊婦健康診査を受けているローリスクで初産の妊娠先行婚女性とした。対象として研究協力が得られたのは、協力施設の助産師の紹介の下、研究の趣旨を説明し、次回健診時に再度研究への参加の可否を尋ね同意が得られた11名であった。

3. データ収集期間

データ収集は、2008年12月～2010年1月であった。

4. データ収集方法

データ収集の手順を図1に示す。データの収集は、これまでの研究成果と事前のパイロットスタディを下に作成した半構成的面接法をもとに、女性に対して妊娠初期（妊娠確定後から妊娠15週前後まで）、妊娠末期から分娩直前まで、分娩後から産褥1か月までの3回の面接を研究者が行った。面接内容は対象の了解を得てICレコーダーに録音した。

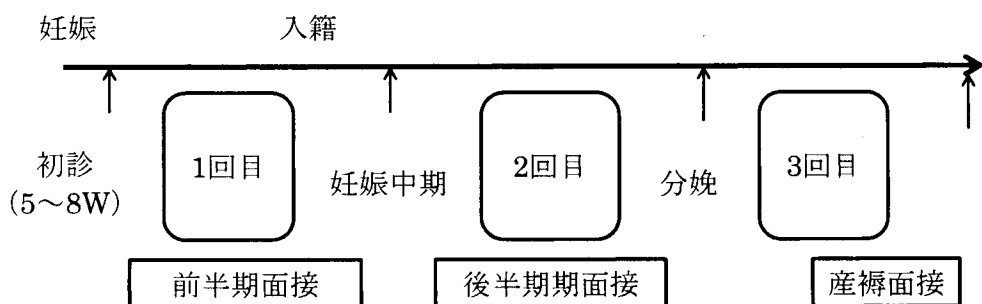


図1. 妊娠経過と面接時期

5. データ分析方法

妊娠先行婚女性の家族形成過程を分析するために、シンボリック相互作用論⁸⁾を理論前提に持つGrounded Theory Approach⁹⁾の継続比較分析も用いた。具体的な分析過程としては、第一に面接逐語を熟読し、カテゴリーを的確にとらえるために特性(プロパティ)と次元(ディメンション)を挙げながらデータを整理した。その後データを切片化しラベルをつけた。次にラベルをカテゴリーにまとめ、出そろったカテゴリーを下にカテゴリー同士の関係を検討し、コアカテゴリー、カテゴリー、サブカテゴリー間の関係を明らかにした。3例の事例をデータ収集後分析し、カテゴリーの類似性と新たなものが見いだせないかを検討しながら、データ収集と分析を並行して行った。内容の類似や差異を比較し、新たなカテゴリーが抽出された場合には、再度データに戻り内容とカテゴリーの再検討を繰り返し、最終的なカテゴリーを抽出した後、構造化を試みた。

6. 真実性の確保

真実性の確保として、パイロットスタディを行い、インタビューガイドの精選とデータ収集技術の向上を図った。分析に際しては質的研究の専門家と母性看護領域の専門家にスーパーバイズを仰ぎながら実施した。

7. 倫理的配慮

調査開始にあたり、対象者に対して、研究の目的と方法、協力の自由意思、拒否と途中辞退の権利とそれに伴う診療上の不利益がないこと、外來

カルテの開示を含む個人情報と面接中のプライバシーの保護の方法について書面と口頭で説明した。次回健診時に再度面会し、研究協力への意思を確認し同意書への署名を依頼し、これを持って研究参加への同意と判断し、研究対象とした。面接は、クリニック内の個室を利用し、プライバシーの保てる環境下で行った。データの取り扱いは個人の匿名化、PCデータの暗号化、ICレコーダーの施設下での管理とし、記録内容は逐語録を作成したのちデータを消去した。

なお、本研究はA大学研究倫理委員会の倫理審査を受け、承認ののち実施した。

V. 結 果

1. 対象の背景

対象の背景を表1に示す。対象者は妊娠後入籍した女性11名で、平均年齢は27.27歳(20~32歳)であった。妊婦健診終了後の面接は1回あたり平均25分(15分~40分)であった。妊娠経過中に合併症で入院治療を要した女性はおらず、全例が正期産期で経膈分娩となっていた。

2. 妊娠先行婚女性の家族形成過程を構成するカテゴリー (表2)

妊娠先行婚女性の家族形成過程を構成するカテゴリーとして最終的に5つのカテゴリー【家族になる意識】【便宜の家族生活の開始】【妊娠中の家族づくり】【分娩による家族の収束】【新しい家族の船出】が抽出された。以下はカテゴリーごとに説明する。なお、表記上の説明として、カテゴリー

表 1. 対象の背景

対象	年齢	初回 面接時週数	初回 入籍状況	職業
A	24 歳	12 週	未入籍	主婦
B	23	14 週	入籍	主婦
C	28	10 週	未入籍	無職（主婦）
D	32	18 週	未入籍	主婦
E	27	18 週	入籍	主婦
F	24	18 週	入籍	主婦
G	25	15 週	入籍	主婦
H	26	15 週	未入籍	無職（主婦）
I	27	10 週	入籍	会社員
J	22	11 週	未入籍	会社員
K	20	18 週	未入籍	無職（主婦）

注：未入籍者はすべて妊娠末期までに入籍済となった。

は【 】, 上位サブカテゴリーは [], 下位サブカテゴリーは< >とした。

1) 【家族になる意識】

【家族になる意識】とは、[妊娠の予感と戸惑い]を感じ取りながらも、妊娠という現象を受け止め家族になろうとする意思決定をしていくカテゴリーであった。今回対象となった女性のすべてが予想してない妊娠であったが、それぞれが感じ取る妊娠の受け止め方には相違があった。すなわち遠いあるいは近い将来をふくめて[結婚の意図]を持っていたカップルの女性たちは、妊娠の事実戸惑いながらも妊娠自体を<結婚のきっかけをくれた妊娠>ととらえ、交際相手と家族になっていくという気持ちを膨らませていた。一方、[結婚の意図]を持たないカップルの女性では、<パートナーとの不調和な交際>を続けているものが多く、妊娠という事実戸惑い<胎児の存在>をなかなか受容できない状況が続いていた。しかし、[妊婦によりそう友人]たちの助言や支援を受けて妊娠の事実を受け止め、結果として、妊娠に対する[パートナーの承認]を得ることで、家族になって子どもを産めるという安心を得て、徐々に

妊娠に対して前向きになっていく姿が伺えた。また、【家族になる意識】には女性を取り巻く[周辺家族の反応]や[妊婦によりそう友人]が影響し、<妊娠に対する親家族たちからの祝意>を得ることで家族になる意識は加速していった。しかし、<順序性に対する親からの叱責>を受けた女性たちは、結婚し家族を持つという意識をなかなか育めない状況にあった。

2) 【便宜的家族生活の開始】

【便宜的家族生活の開始】とは、妊娠の判明に伴い、急いで入籍し同居を開始しながら、とりあえず家族としての形と夫婦としての生活を始めていくカテゴリーであった。妊娠の判明に伴い、パートナーや親家族からの妊娠に対する承認を得た女性たちは、<周囲に急かされる入籍>を行い、中には<親が準備する結婚式>を挙げる者たちもいた。女性の周囲はできるだけ妊娠と結婚のタイムラグがないようにとカップルに入籍を勧める傾向があった。また、妊娠初期で体調的にすぐれない時期にあった女性たちに変わり、特に女性の実母を中心とした親家族が結婚式の準備を行い、結婚式を挙げさせていた。これは、女性は自分の周囲から妊娠と結婚双方に対する承認と祝意を得ることが可能となり、夫婦という家族になることを改めて自覚することにつながっていた。女性たちは入籍・結婚という[急かされた社会的手続き]を経て、さらには家族としての形を整えるべく、[支援者に支えられた巣作り]を行っていた。夫婦は新しい家族の棲み処を探し居を構えようとするが、その際には親家族からの物心両面での支援を受けていた。女性と夫は、<妊婦が安心できる巣を探す>ことを行っていた。夫は女性の体調を気遣いながら妊婦である妻の実家近くに新居を探し、それに対して親家族たちも物件の検討へ参加したり、経済的な支援を行ったりして新しい家族の巣作りを応援していた。また、中にはどちらかの親家族の中に同居して巣を作るという<パラサイト同居>を行い、家庭生活を夫婦丸ごと親家族に面倒を見てもらうというか夫婦や、新しい巣を探さず<同棲から同居へ>と巣の位置づけを替える夫婦もいた。これら夫婦の背景には、経済的な

妊娠先行婚女性の家族形成過程の特徴

表2. 妊娠先行婚女性の家族形成過程を構成するカテゴリー

【カテゴリー】	〔上位サブカテゴリー〕	<下位サブカテゴリー>
家族になる意識	妊娠の予感と戸惑い	妊娠してしまった戸惑い パートナーの動揺 胎児の存在
	結婚の意図	結婚のきっかけをくれた妊娠 パートナーとの不調和な交際
	親になる覚悟と混乱	パートナーへの報告 家族になれる喜び 妊娠の順序性への後ろめたさ 妊娠継続への不安
	パートナーの承認	パートナーの妊娠の承認
	周辺家族の反応	妊娠に対する親家族たちからの祝意 順序性に対する親からの叱責
	妊婦によりそう友人	友人の後押しによる妊娠確認 妊娠生活のコーチ
便宜的家族生活の開始	急かされる社会的手続き	周囲に急かされる入籍 親が準備する結婚式
	支援者に支えられた巣作り	妊婦が安心できる巣を探す パラサイト同居 同棲から同居へ
	「妊娠夫婦」のスタート	一緒に妊婦健診を受ける 妻として気遣われる嬉しさ 夫が胎児に寄せる関心への喜び
妊娠中の家族づくり	協同作業としての分娩準備	夫婦で協同した分娩準備 実母と楽しむ分娩準備 友人が支援する分娩準備 一人で頑張る分娩準備
	「こども」を意識した交流	名前を二人で考える 「似ているところ」探し
	夫婦としての生活	妻・妊婦として気遣われる喜び 自分の体調に合わせた新しい生活 夫の生活の自立
	親家族との良好な関係	出産体験者としての義母 嫁に対する義母の気遣い 妊娠経過を気遣う親たち
分娩による家族の収束	分娩体験	肯定的分娩体験 否定的分娩体験
	期待と失望	二人で確認した次子希望 役に立たなかった夫 夫への気遣い
	経験者からの支援	頼りになる母たち
新しい家族の船出	子どものいる生活	親としての気持ちを育む育児 孤軍奮闘の育児
	夫婦で育て合う	夫の子育て力を育む 子どもと夫の橋渡しをする 可愛がるだけの夫への不満
	親家族との距離	夫ー私（こども）ー親の関係 応えてくれる実母 親家族たちの衝突
	新しい家族の絆形成と瓦解	育児スタイルの確立 「きちんとした」子どもの親になる こどものための関係修復の試み

未熟さと社会的な未熟さが最後まで付きまとい続けた。

3) 【妊娠中の家族づくり】

【家族になる意識】を持ち、【便宜的家族生活の開始】によって自分たちの巣を決めた女性たちは、【妊娠中の家族づくり】を試みるようになっていった。【妊娠中の家族づくり】とは、夫や家族とともに分娩に向けてのさまざまな準備を行う【共同作業としての分娩準備】や、胎動が感じられるようになった胎児を交えて「似ているところ」さがしや「名前を二人で考える」などこどもの親であることを意識した「こども」を意識した交流を夫婦で持つことによって、【夫婦としての生活】を通しての夫婦の相互交流や親家族との交流を活性化させ、夫婦としての生活を発展させていた。しかし、このような【共同作業としての分娩準備】や「こども」を意識した交流が夫とできなかった女性や、親家族に寄生した生活を送る夫婦では「夫の生活の自立」が育まれず、結果として「自分の体調に合わせた新しい生活」が組み立てられない女性や、家族になりきれないもどかしさや新しい家族に馴染めず、自分の親家族から切り離される寂しさを体験し、より自分の実母を中心とした親家族からの心理的な支援を求めている。またこのような女性たちは分娩に対する不安も強く分娩準備をしながらも、中には死の恐怖まで感じ取っている女性もいた。これは【妊娠中の家族づくり】がうまくいっている女性には見られない特徴であった。

4) 【分娩による家族の収束】

これまで経験したことのない分娩という経験を通して、女性たちは【分娩による家族の収束】も同時に経験していた。【分娩による家族の収束】は2面性を持っており、「肯定的分娩体験」をしていた女性たちは、夫の分娩立ち合いの如何に関わらず「二人で確認した次子の出産予定」のように、分娩によって今後さらに新しい家族を持つ意思を確認し、自分たちの家族の今後に「期待」を抱いていた。しかし「否定的な分娩体験」を語っていた女性たちは、立ち合い分娩に際して、自分が想像していた役割を夫が果たせなかったことを

嘆き、「役に立たなかった夫」と評し【失望】を表していた。しかし、「役に立たなかった夫」と評しながらも、その不満をぶつけることで夫との関係にひびが入ることに不安を抱いていた女性たちは、そんな彼らに対して「夫への気遣い」を示し、そうすることで「役に立たなかった夫」という自分の評価を払拭しようとしていた。

また、多くの女性は分娩経過中に、実母または義母の付き添いや面会を受け、出産経験者である母親たちからの励ましやケアを受けられたことを喜んでいった。

5) 【新しい家族の船出】

【新しい家族の船出】とは、妊娠分娩を終了し、子育ての時期に入った夫婦が、新しく誕生したこどもとの生活を踏まえて、自分達らしい生活をスタートさせている様子を表したカテゴリーであった。【分娩による家族の収束】がうまくいった夫婦では、最初のうちは「応えてくれる実母」の直接的な援助によって子育てをスタートさせていたが、子育てが軌道に乗り始めると「親家族たちとの距離」を少しずつ離しながら、【夫婦で育て合う】育児を実践し、【こどものいる生活】を始めていた。このような家族では夫婦としてばかりではなくこどもの親であるという自覚が夫婦双方に育まれ、それに伴い親としての育児をしていく力を習得していく姿が見受けられ、【新しい家族の絆形成】していく過程が認められた。しかし、同じ【こどもがいる生活】にもかかわらず、「孤軍奮闘の育児」を母親一人で展開している夫婦には、夫婦間での相互交流が希薄であり、結果として妻が望むような育児協力が得られない夫に対して妻は「可愛がるだけの夫への不満」を募らせていった。こういう夫婦を見ている親家族の中には、次第に自分たちのこどもである妻または夫それぞれの側を擁護し、互いを非難し合う姿勢が見られるものも出現し、結果として「親家族たちの衝突」を招く事例も認められた。「親家族たちの衝突」がある場合も産褥早期の状態にあるため、こどもの将来のために離婚を避けたいとする妻の意向を汲んで「こどものための関係修復の試み」がなされようとしていた。しかし、このような夫婦のみなら

妊娠先行婚女性の家族形成過程の特徴

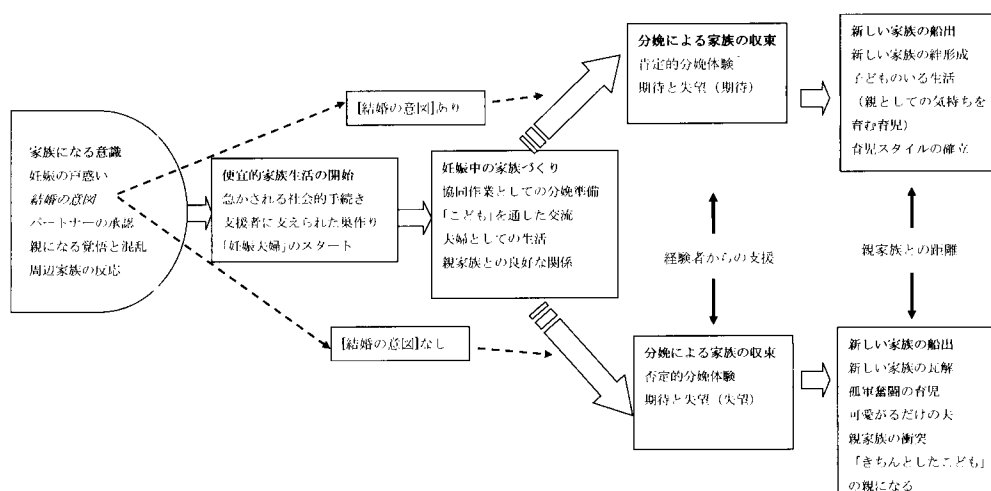


図 2. 妊娠先行婚女性の家族形成過程の構造試案図

ず親家族を巻き込んでの衝突は、結果として夫婦の間に溝を作り、夫婦として相互交流にも影響を及ぼし、[新しい家族の瓦解]を導く要因となっていた。また、[こどものための関係修復の試み]をしようとする女性たちの多くは、夫による育児を期待していないため、＜「きちんとした」こどもの親になる＞ことに強い意思を見せていた。女性たちは「きちんとしつけのできたこども」の親になることで、外見的な家族に対する良い評価を得ようとしていた。

3. 妊娠先行婚女性の家族形成過程の構造の試案（図2）

本研究から抽出された5つのカテゴリーを用いて、妊娠先行婚女性の家族形成過程の構造を試みた。まず、女性たちは妊娠が判明したことにより【家族になる意識】を持ち始める。この意識を持ち、パートナーや親家族から妊娠に対する承認や祝福を得ることで新しい家族を作るための行動に出る。まず【便宜的家族生活の開始】が行われ、この家族生活の中で夫婦として【妊娠中の家族づくり】をしようと試みる。【妊娠中の家族づくり】の中で夫婦としての相互交流やこどもを交えた交流をすることで、夫婦としての生活を軌道に乗せることが可能となり、さらに肯定的な分娩体験をすることで【分娩による家族の収束】が一気に起

こり、周囲からの支援を上手に活用しながら自分たちの【新しい家族の船出】へと至ることができていた。一方、同じように【便宜的家族生活の開始】を開始し、【妊娠中の家族づくり】を試みようとするが、この過程での夫婦の相互交流がうまくいかず、十分な分娩前の夫婦・親家族を交えた分娩準備ができない状況にあった女性たちは、【分娩による家族の収束】が成功せず、結果として不安定なままの【新しい家族の船出】を迎えるに至っていた。このような家族形成過程においては、いずれの時期においても親家族のさまざまな支援と援助が提供されており、その支援と援助をいかにうまく使いこなすことができるかによっても、【新しい家族の船出】が成功裡に進むのかあるいは不安定なまま進行していくのかという方向性が左右される結果が考えられる。

また、妊娠先行婚では、「予期せぬ妊娠」によりこのような家族形成過程がスタートすることが多いが、この場合も【結婚の意図】の有無、すなわち、もともと家族になる暗黙の了解がカップルの間に存在した上での交際であったか否かが、その後の家族形成過程に深く影響していた。以上のことから、「妊娠先行婚女性の家族形成過程の構造試案図」を図2のように作成した。

VI. 考 察

妊娠先行婚女性の家族形成過程の構造試案を通して、妊娠先行婚の家族形成の特徴と必要とされる看護支援について考察する。

家族形成に影響をもたらす「結婚の意図」

妊娠先行婚女性の家族形成過程の大きな特徴の一つは、妊娠前の交際における「結婚の意図」の有無が、妊娠の判明とそれに続く家族形成過程に影響を及ぼしている点である。今回の対象者たちは、交際期間中に同棲を経験しているものもいれば、同棲を経験せずに妊娠に至ったものもいた。しかし、同棲の経験は家族形成過程においては、ほとんど影響を持たず、それよりも将来的な結婚や家族を持つことへの言語的な了解あるいはカップルの間での暗黙の了解に基づいた上での交際に大きく影響を受けていた。家族形成のプロセスにおいて望月⁹⁾は、「新婚期の基本的な発達課題は新しい家族と夫婦関係の形成であり、出産計画など家族生活に対する長期的基本計画を立てること」と述べている。新婚期でなくとも、交際の過程において結婚やそれに伴い家族を形成・拡大している意思を持っているか否かは、予期せぬ妊娠を目の前にした時の妊娠の受容に大きく影響するのではないだろうか。「結婚の意図」のない妊娠であるからこそ、妊娠の判明に動揺し、さまざまな人々の支援を受けた家族となっていくが、その時々「結婚の意図」のない妊娠であるという事実が家族形成過程、特に夫婦関係の構築や相互交流に影響を及ぼしているのではないだろうか。また「結婚の意図」の有無は、女性ばかりでなく、一方の妊娠の当事者であるパートナーの妊娠の受容や家族形成過程にも大きく影響を及ぼすと考えられる。

しかし、必ずしも「結婚の意図」が家族形成過程に有効に働くとは限らない場合もある。永田¹⁰⁾は、結婚モラトリアムを妊娠という契機で解消する方法が妊娠先行婚であり、結婚に伴う家族形成過程では、発達課題や新しい家族との関係づくりに苦労している様子が伺われるとする報告もある。今後は、この点についてもさらなる検証が必

要となる。

人間的「未熟性」が家族形成にもたらす影響

次の特徴としては、家族形成における夫婦それぞれの未熟性がもたらす影響の大きさである。妊娠先行婚の女性たちの家族形成過程においては、実母・義母を中心とした親家族たちや友人たちからの、身体的・心理的・経済的な支援が影響していたが、それを受ける女性たちの心理的な未熟さが家族形成過程に影響を及ぼしていると考えられる。今回の結果から最終的に【新しい家族の船出】に至ったケースでの親たちからの主な支援は、身体的・心理的な支援であった。うまくいっているケースでは、自分たち夫婦の巣を持ち、妊娠中の生活を通して、妻として夫から労わられる感覚を経験し、夫からの労わりを自覚していることを夫に対して表示していくというような相互交流を繰り返したり、夫として妊娠している妻に迷惑をかけないように自分の生活を自立させていったりというような夫婦としての機能の発達を見せていた。加えて、自分たちで親家族との距離や支援内容を調整しながら、必要な時に必要な支援を自ら欲し、親たちもそれに見合う支援を提供しており、最終的には新しい家族として親家族から自立し家族としての機能を獲得していったと考えられる。しかし、【新しい家族の船出】がうまくいかなかったケースたちでは、妊娠中の相互交流についても多くの不全点が発見された。彼らはこどもを介しての相互交流には積極的でも、妊娠中の妻を労わる配慮を感じられない夫たちの存在や、夫からの労わりがあるにも関わらずそれを感じとれないあるいは不足していると感じる妻たちの存在があった。また、生活の中でも自分のことは自分で面倒をみて、妊娠中の妻に負担をかけないようにするといった家族員としての夫の生活の自立が認められないものもあり、結果として夫婦としての機能の発達が認められなかった。また、このような夫婦では、妊娠中の生活において、特に経済的な面において親家族からの全面的な援助を受けていた。「パラサイト同居」というサブカテゴリーの抽出の背景にはこのような、夫婦としてのまた、人間としての未熟性が大きく影響していると考え

られる。また、このような夫婦の問題に対して親家族がそれぞれのこどもの立場で介入衝突する場面もあった。夫婦としての未熟性には、それにかかわる親家族の接し方にも影響があるのではないだろうか。今回の対象者は全員成人しており、自分たちの意思で結婚を選択しているが、妊娠先行婚自体は、20歳未満の若い世代に多く見られる結婚形態である。個人としての発達途上にある世代が、妊娠・出産を引き受け経験し自分たちが親役割をひきうけていくことには、さらなる未熟性が影響することが、本研究結果からも示唆される。その結果が端的に現れているのが、10代の妊娠先行婚夫婦の離婚率の高さであると考えられる。また、前述したように、妊娠先行型の結婚をした母親はこもとの愛着形成レベルが低くなり、否定的な感情を持ちやすく、加えて父親の育児参加も低くなると報告している。妊娠先行婚を経験する女性たちは、親になっていく課題と夫婦として家族になっていくための課題が併存している特異な集団である。このような家族形成過程を持つ集団に対する支援の開発が急務である。出産後の夫婦の関係性の変化に着目した文献では、分娩後2年程度までは夫婦の関係性の質が低下すると述べられている¹¹⁾¹³⁾。これらの研究は、従来型の結婚後妊娠を経験した夫婦を対象にして実施されたものである。それ以前に家族として、夫婦としての未熟性をはらんでいる妊娠先行婚の夫婦に対しては、より一層の観察と支援が必要になると考えられる。そのためにも、妊娠分娩育児を支えていくための多方面からのサポートシステムの確立が必要であり、これらのサポートシステムの構築に当たっては、産科医療分野に限らず、妊娠判明時からのスクリーニング、妊娠支援、夫婦関係カウンセリング、ソーシャルワーク、地域における再スクリーニングと観察・支援などを多分野を網羅することを視野に入れた医療・地域支援ネットワークシステムの開発が今後必要になっていくと考えられる。

VII. 結 論

11名の妊娠先行婚女性の家族形成過程として、

【家族になる意思】【便宜的家族生活の開始】【妊娠中の家族づくり】【分娩による家族の収束】【新しい家族の船出】の5つのカテゴリーが抽出され、これらのカテゴリーを基に、妊娠先行婚女性の家族形成過程の全体像の特徴が記述され、以下の点が示唆された。

1. 妊娠先行婚では、妊娠に先立つ時期に「結婚の意図」を持つか否かによって、その後の家族形成に大きな影響が及ぼされる。
2. 妊娠先行婚女性の家族形成過程においては、夫婦双方の未熟性が家族を形成する上でのリスクとなっている。
3. また、2の点については、夫婦双方の親家族と夫婦とのかかわり方も影響を及ぼしている。
4. 今後増加していく妊娠先行婚夫婦に対しては、医療・地域の両面からのサポートネットワークの構築が求められる。

謝 辞

本研究にご協力いただきました女性とそのご家族の皆様、ならびに研究協力施設のスタッフの皆様に深く感謝いたします。

文 献

- 1) 法橋尚宏, 本田順子, 平谷優子: 妊娠先行型結婚をした養育期家族の家族機能, 保健の科学, **50**(1), 38-41, 2008
- 2) Cox, M., Paley, B., Burchinal, M., Payne, C.C.: Marital perceptions and interactions across the transition to parenthood, *Journal of marriage and the Family*, **61**, 611-625, 1999
- 3) 厚生統計協会編: 平成17年度出生に関する統計, 財団法人厚生統計協会, 東京
- 4) Messer, L.C., Dole, N., Kaufman, J.S., Savitz, D.A.: Pregnancy intendedness, maternal psychological factors and preterm birth, *Maternal Child Health Journal*, **9**(4), 403-412, 2005
- 5) Orr, S.T., Miller, C.A., James, S.A., Babones, S.: Unintended pregnancy and preterm birth, *Paediatric Perinatal Epidemiology*, **14**(4), 309-313, 2000
- 6) Goto, A., Yasumura, S., Yabe, J., Reich, M. R.: Addressing Japan's fertility decline: influences of unintended pregnancy on child rearing, *Reproduc-*

- tive Health Matters, **14**(27), 191-200, 2006
- 7) 鎌田健司：婚前妊娠に関する規範的要因の分析，経済学研究論集，**25**, 43-60, 2006
 - 8) 船津衛，宝月誠編：シンボリック相互作用論の世界，恒星社厚生閣，東京，1995
 - 9) 望月嵩，本村汎編集：現代家族の危機 新しいライフスタイルの設計，有斐閣選書，東京，1980
 - 10) 永田夏来：夫婦関係にみる「結婚」の意味づけ－妊娠先行型結婚と恋愛結婚の再生産－，年報社会学論集，**15**, 214-225, 2002
 - 11) Belsky, J., Lange, M.E., Rovine, M.: Stability and Change in marriage across the transition to parenthood: A second study, Journal of marriage and Family, **47**, 855-865, 1985
 - 12) 堀口美智子：「親への移行期」における夫婦関係－妊娠期夫婦と出産後の夫婦の夫婦関係満足度の比較を中心に－，生活社会学研究，**7**, 81-95, 2000
 - 13) 小野寺敦子：親になることにともなう夫婦関係の変化，発達心理学研究，**16**(1), 15-25, 2005